



第 51 号
平成29年10月31日 発行
— 発 行 —
埼玉県立がんセンター
発行責任者
病院長
坂本 裕彦

基本“唯惜命”
理念

私達は生命の尊厳と倫理を重んじ、先進の医療と博愛・奉仕の精神によって、がんで苦しむことのない世界をめざします。

目次

- 事務局長就任のご挨拶..... 1
- 乳腺腫瘍内科の紹介..... 2
- 5階西病棟の紹介..... 3
- 人工塩基DNAアプタマーによるがん細胞標的療法・診断法の開発／サイエンススクール開催..... 4



埼玉県のマスコット コバトン

埼玉県立がんセンター



事務局長
山瀬 陽一郎

事務局長 山瀬 陽一郎

今年度、事務局長に就任いたしました。生涯のうち2人に1人ががんになると推計される今日、埼玉県立がんセンターの役割は益々重要になっており、責務の重さに身が引き締まる思いであります。病院局勤務は初めてですので、何とぞご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

当センターが目指すのは、「先進的ながん医療を実践する進化する病院」・「日本一患者と家族にやさしい病院」です。

このため、最先端の技術と設備により手術・放射線・化学療法の3大治療を一層充実させるとともに、PET-CTや次世代ゲノムシーケンサーにより診断精度の向上、個別化治療に取り組んでいます。また、緩和ケアセンターを設置し、入院・外来・在宅、いつでも・どこでも緩和ケアを受けていただけるよう体制を整えています。

日本一患者と家族にやさしい病院としては、医療面、看護面は勿論のこと、地域連携・相談支援センターでは、さまざまな不安や悩みを抱えていらっしゃる患者さんやご家族のお話を伺い、問題解決のお手伝いをさせていただいております。また、病院の中央には2層吹き抜けの「ホスピタルストリート」を配置

し、家族との団らんスペースを随所に用意するなど、明るく開放的な空間を設けております。



さらに、患者

さんが生活の中で音楽や笑い、人々とのふれあいを持つことは免疫力を高めるなど良い影響を及ぼすといわれています。そこで、ボランティアの方々による音楽コンサートなどのほか、今年は初めてお笑いの催しを



日本フィルのボランティアコンサート
(協力:県産業文化センター)

開催するなどし、入院生活に安らぎや潤いが生まれるよう努めています。

今後とも目指すべき病院の実現のために、坂

本病院長を先頭に一致団結して取り組めるよう微力ながら努めてまいりたいと存じます。また、地域の医師会、医療機関の皆さまには、日頃の連携とご協力に厚く感謝申し上げます。

国の「第3期がん対策推進基本計画」が策定されます。がん医療の均てん化と集約化が進む中、がんセンターに求められるニーズも変化していくことが考えられます。病院を取り巻く環境の変化に事務局としてもしっかりと対応できるよう努めてまいりたいと存じます。



乳腺腫瘍内科の紹介

乳腺腫瘍内科 科長兼部長 井上 賢一



2018年4月より、内分泌科より乳腺腫瘍内科になり10年になります。2017年度より常勤医4名、非常勤2名と6名体制で診療を行っています。欧米では一般的

ですが、乳がんの薬物治療を専門に診療している全国でもめずらしい科です。治療の対象は、乳がんの手術前・後の化学療法を受ける方や再発・転移した患者を今までに累計5000人を診療しています。日本において、乳がんの発生率は、増加の一途をたどっています。一方、進行・再発乳がんの生存期間の延長は、薬物療法の進歩と認知されています。2016年度は外来通院治療センター利用者数の23,344件数中6,537件が乳腺腫瘍内科の患者で3分の1弱を占めています。

当科の基本方針は、第一はチーム医療です。当科医師だけでは乳がんの診療は成立しません。乳腺外科、病理診断科などを中心に病院内の全科医師との信頼と連携、看護師、薬剤師、技師、ソーシャルワーカー、リハビリテーションなどのコメディカルとの理解と協調によって多数の患者の診療を可能にしています。特に、化学療法は患者に副作用を引き起こします。そのときに、コメディカルのサポートは治療継続するために重要な要となっています。第二は、エビデンス（根拠）に基づいた適切な治療です。乳がんは、欧米と日本の臨床試験を参考にしながら、乳癌診療ガイドラインが作製され他がんより標準治療の個別化が進んでいる疾患といえます。病理結果や患者の状態により、説明と同意の中で治療選択が行われま



す。特に、分子生物学的研究の進歩に伴い新しい知見が続々と発表され、治療薬とともに遺伝性乳がんについても注目されています。第三は、臨床試験の推進です。JCOG（Japan Clinical Oncology Group）やSBCCSG（Saitama Breast Cancer Clinical Study Group）などの全国やローカルの臨床研究グループに参画して、日本における乳がんの標準治療のエビデンスを作ることに務めています。第四は、治験の積極的参加です。日本では承認されていない薬剤を国内外のプロトコールをもとに治療効果を判定し、効果ある薬剤を日本でも使用できるようにします。特に、この分野は種々の薬剤が開発されています。一方、毒性も今までの薬剤と異なります。そこで、保険適用された際にも、使用経験を活かし、より患者に適切な対応に努めています。第五は、基礎研究への貢献です。研究所との共同研究を進めていくことで、より乳がんを理解して診療に役立てることで、以上、紹介させていただきました。

特に、治験に参加されたい患者がおられましたら、Eメール（ino@cancer-c.pref.saitama.jp）していただければ幸いです。人員の増加に伴い以前より他院で再発された患者の受け入れを積極的に行えるようになって参りました。まだまだ、不十分な点が多々あることと存じます。今後とも、乳腺腫瘍内科につきまして、なにとぞご指導ご鞭撻よろしく申し上げます。

乳がん治療のキーポイント



5階西病棟 病棟紹介

5階西病棟 看護師長 赤坂 和美



5階西病棟 看護師長
赤坂 和美

5階西病棟は、消化器外科病棟で主に、胃、肝臓、胆嚢・胆管、膵臓および大腸疾患の患者さんが手術目的で入院しています。手術は、侵襲の少ない腹腔鏡下手術が主流で、傷口が小さいため、開腹手術より術後の回復が早く入院期間も短くなりました。大腸では、最も肛門に近い下部直腸癌に対し、一時的な人工肛門はありますが、肛門を温存する手術をいち早く取り入れ実施しています。



手術を受ける患者さんは、病気のことだけでなく手術や麻酔に関する様々な不安を持っています。患者さんには、些細なことでも遠慮なくスタッフに話

していただき、不安が少しでも軽減し、心身共によりよい状態で手術に臨めるよう準備していきます。

手術後は、回復を促し術後合併症を予防するための早期離床が重要です。「動くときが痛いのでは？」と心配される方もいますが、痛み止めを使用しながらストレスのないように離床を進めていきますのでご安心ください。最初は、看護師がそばにつき添い、状態を観察しながら安全・安楽に離床できるよう支援いたします。

消化器のがんは、食べ物の消化・吸収を担う臓器の病気です。そのため手術後の食事のとり方も大切です。特に、胃癌の手術後では、食べ物が急速に小

腸内に流入することで起こる腹痛や下痢、食後一過性の低血糖発作などを起こすことがあります。そのため、食事のとり方や栄養についてNST（栄養サポートチーム）と連携し、患者さんにあった食事方法や食事内容の工夫を検討しています。退院後も安心して生活できるよう、活動、休息、排便習慣の確保など入院中から進めていきます。



直腸癌で一時的または永久的な人工肛門を造設される患者さんに対しては、人工肛門の位置を決めたり、セルフケアの指導、使用装具の選択など、皮膚・排泄ケア認定看護師と連携しながらケアを行っています。私たちは、患者さんの病状や治療・看護に関する情報を共有し、最善のケアを提供するため、医師との合同カンファレンスを行ったり、退院後の生活を見据え安心して退院できるよう、多職種を含めた退院支援カンファレンスを行っています。

手術を乗り越え、退院されるときに患者さんの笑顔はとても素敵で、いつも励まされています。これからも、スタッフ一同、質の高い医療・看護に取り組み、「日本一患者と家族にやさしい病院」をめざして、日々努力していきたいと思ひます。



人工塩基DNAアプタマーによる がん細胞標的療法・診断法の開発



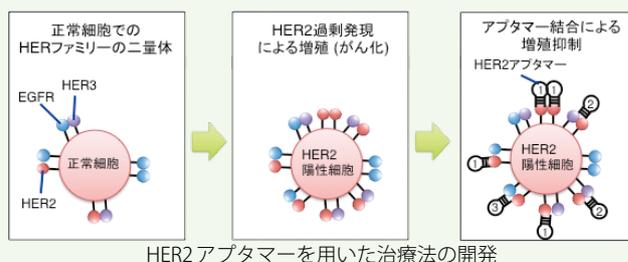
臨床腫瘍研究所 技師
迎 恭輔

臨床腫瘍研究所 技師 迎 恭輔

ヒト上皮増殖因子受容体2 (HER2) タンパク質は、正常な細胞にもわずかに存在し、細胞の増殖調節機能を担っていると考えられていますが、過剰に発現したり活性化したり

して細胞の増殖や悪性化に関わるとされています。HER2タンパク質の過剰な存在は、乳がんの予後因子の1つで、特にリンパ節にがんが転移している場合でHER2が陽性だと、再発の危険性が高くなると言われています。HER2陽性乳癌は予後不良のフェノタイプとされてきましたが、近年の抗HER2療法である分子標的治療(トラスツズマブ療法)の登場により治療成績は飛躍的に向上しました。生検や手術で摘出した組織にHER2が過剰に発現しているのが認められれば、トラスツズマブ療法の効果が期待できます。その一方で、一部のHER2陽性転移再発乳

癌患者はトラスツズマブに不応性であり、また効果を認めた症例においてもその約半数が1年以内に耐性を獲得する可能性があります。分子標的薬を使い続けているうちに、薬が効かなくなって症状が悪化することがありますが、その原因は分子標的薬が結合する標的分子の変化、標的分子とは別のルートでがんを増殖させる因子の活性化などと考えられています。しかし、同じ標的因子に複数の薬がある場合には1つの薬が効かないとしても、別の分子標的薬が効果を発揮する可能性があります。したがって、薬剤耐性の克服が分子標的薬治療の大きな課題であるとされているため、薬剤耐性に対応するためにも、DNAアプタマーという異なる方面からの標的薬開発が、がん克服に繋がると期待されます。この開発によって、がん細胞の個性に適応した治療法開発に貢献できることを願っています。



サイエンススクール 開催



臨床腫瘍研究所
主任研究員
生田 統悟

臨床腫瘍研究所 主任研究員
生田 統悟

臨床腫瘍研究所では、8月3日(木)にサイエンススクールを開催しました。これは生命科学に対する興味を深めてもらうことを目的とし、鴻巣高校の生徒さん10名が参加し

て、分子生物学の実験操作を体験してもらうものです。高校の理科の先生も見学に参加しました。

朝の9時半に臨床腫瘍研究所に集合し、簡単な講義のあと、3つの班に別れて研究室へ移動します。この日の実験の目的は、「ALDH2という遺伝子のタイプを自分自身の遺伝子を使って調べてみよう」というものです。ALDH2は、アルコールの分解に関わる遺伝子で、人によって異なるアルコール分解能力は、この遺伝子のタイプに起因することがわかって

います。実験材料は、生徒さんの毛髪に付いている細胞から抽出するDNAです。カンファレンス室に集まった生徒さんは、まず髪の毛を5本抜くことから実習が始まります。

実験では、1ミリリットルの1000分の1というわずかな量の溶液を扱います。そのための特殊なピペットを操作して、微量の溶液を混ぜ合わせ、目的の遺伝子を増幅するためのPCRの反応液を各自で調整しました。みなさん、自分のALDH2のタイプを判定するところまでたどり着いたようで、最後に実験結果の報告をしてもらいました。

書いてもらった感想の中には、「良い経験ができて楽しい時間が過ぎせた」、「学校でできない実験や機械の見学ができてよかった」、「将来の進路選択に役に立った」などの言葉がありました。私たちも若い人たちに囲まれ、日常とは違う楽しい時間でした。

